

# 注解『七十一番職人歌合』稿(十八)

下房俊一

## 凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第三十九番および第四十番の注解を収めた。

三十九番 玉磨 硯切

## 【職人尽】

〔飛鳥井雅康 職人歌〕二番石 すゝ屋

軒の露たまやの月のかけみれはみかゝすともこと足ぬへし

〔吾吟我集〕寄玉恋 一度二度言ふてならずと捨てをかじ下和が玉もあればあふ世に / 寄硯恋 泗浜石しゆひんせきの硯ならねと

筆染めてかくや泪の露の玉づさ / 硯 筆の先の兎も水を走りつつ硯の海に入る窓の月 〔訓蒙函箋〕玉人たまよじん たますり。

玉たま工こう同。 / 硯工けんこう すずりきり 〔銀葉夷歌集〕寄玉恋 思ひつつ幾夜へんくはが玉にだにあふてえ言はず人の知らね

ば八重勝▽ 塵の身の取りつき吸いつき離れぬは是ぞ琥珀の玉にあふ君八重勝▽ 〔大団〕寄硯恋 床に置く硯もて来ひ

此の程の思ひを述べてさらば一筆 / 寄硯恋 思ひあまり先づ一筆を葉籠蓋やちかぶたの硯箱のみ手もたゆく取る 寄硯石恋 返

り事すずりの石の海の底の深くもあらぬさまが言の葉 (人倫訓蒙図彙) 珠摺 眼鏡、珠数粒、舍利塔、皆水晶をもつて造る。其の外諸の石緒占、是を造る。金剛砂に水を洒ぎて、鉄の樋にあてて、是をするなり。伝へ聞く、唐土にはさまざまの名珠有り。日本にては、昌泰年中に陸奥より掘り出だせり。京御幸町通四条坊門の下、其の辺に住す。大坂は伏見町にあり。 / 硯師 硯は文殊の眼を表す。海は智慧を表すとかや。諸国より名石あつて、京に上る。近江、土佐、長門、美作等にあり。京硯師、所々に住す。嵯峨石、高雄石あり。石は、漢の武帝の時、石にてこしらへしとかや。それより前は、鉄にて鑄物にてありと也。 (春駒狂歌集) 寄硯恋 あはれ知れ筆の命毛切れやせん硯の墨のくろうする身を (狂歌種ふくべ) 寄玉恋 添ひ臥しに今宵琥珀のたまたまにすいよらいでは塵の身じや物流水 (狂歌活玉集) 寄硯恋 我が恋は墨と硯の中々に水さす人は薄い心じや / 汗似水晶 御異見に塵をひねりて玉の汗は身を水晶にみかく心じや (彩画職人部類) 硯 西京雜記、天子ハ以レ玉ヲ為レ硯、且唐人只多以レ瓦ヲ為レ硯ト。五雜俎ニ云、端州ノ石最モ良。益ス墨青紫色一者、可シ直千金ナル。源氏物語、姫君、御硯をやをら引きよせて、手習ひのやうに書きませ給ふを、是に書きたまへ、硯には書き付けざなりとて、紙奉り給へば、とあり。 見る石の硯に物は書かざりき節の楊枝も使はざりけり 菅家 (誹諧職人尽) 玉すり 君が代やみがく事なき玉椿へ越人 玉摺のかはらを照らす螢哉へ半秋 草の葉のほとほとするや露の玉へ白主 たま摺のするする眠る春日かなへ杉国 玉すりの寐覚めも丸く年暮れぬへ水府 麗斗 玉摺よ人も心の花曇りへ同 沾磷 玉すりの手本にせよと霰かなへ鳥羽 巴洲 木賊から磨き出だすや玉兔へ波道 枝梅や玉にくらべてまたをろかへ芳津 玉すりや磨き上げたる夏日和へ都江 たま摺の心はいかに今日の月へ万珠 玉摺の手のくぼよりぞ月寒しへ七十翁 常仙 みがけばや書中女あり雪の窓へ水戸 露白 あまかはら心よやあら玉細工へ寥和 / 硯きり 菊の香に鳩も硯の水添へんへ嵐雪 ありがたや花の硯の石見がたへ青流 硯切る蔓や駿河の葡萄石へ雲蔵 汐干にも乾かぬ袖よ硯きりへ水戸 豆花 硯切る音もたまましぐれ哉へ杉国 手初めには若紫やすずり切へ逸秋 花や鳥やしづごころなき硯きりへ水戸 沾橋 いろいろの花の姿や嵯峨硯へ万珠 土佐といふ硯屋で今日石買はんへ寥和 (今様職人尽百人一首) すり師 音に聞く高島硯青石のはしりや墨の水をこそもて 「研がずばなるまい。切れぬ」此の石は肌がよい。よく水をもとぶ (職人尽発句合) 十二番左 玉磨 凄きまで磨き上げ

たり冬の月 凄きまでといへる寒月の気色は、玉磨が手際ながら、針のごとく光の冴えたる風情（右歌）は、一しほ勝りて、勝ち待らん。／＼ 五十八番左 硯切 硯彫る音や通ひて子規 硯彫りもて、初音を待ちわびて、あらぬ物音まで、さはと耳傾げたる、やさし。 「赤間の硯は、昔より名有り」 （今様職人尽歌合）硯切 咲く花にいとふ雨畑硯には風といふ字の形もほりせず 甲斐の雨畑石を得ても、羲之が風字研は彫らせまじと、花にたいして雨風をいとへる情、硯の海浅からず見ゆれど、……（きせる師）勝たるべし。 「昔も、石王寺は切りにくしと言ひたるを、まして招潮形にとのあつらへは、いかばかりか手間の要らん」／＼ 澄み昇る月のあかまの硯には雲の根となる石も切らばや 左右、月に對して雲をいとふ心、言ひおほせて聞こゆ。尤もよきもち月にこそ。／＼ 照る月の兔のかたに作らせん硯石切る土佐の海原 我が切りし硯の海の干るまでに書く玉づさのかひもあれかし／＼ さぞ今宵あかま硯も須磨あかし心にほりす月をみるかも 富士に似て逢ふとき知らぬ恋の山切りし硯の海に出来けん／＼ 今までは何をすずりの手業とて年を数ふるばかりなりけり 切りて出す硯の海は浅くとも深く思へる君にもあるかな 我が切りて硯の海の出来しより涙に袖の乾く間もなし なりはひに憂き日を送る硯切老いたる年を数へてぞある 切り出だす硯の海はありながらなみなみならぬ身を恨むかな 我が袖の乾く間もなき硯切人に心を沖の石にて 堅き中石は切れども変はらじの金剛砂知る我が心かな （略画職人尽）切り開く硯の海に水かさも増せる五月の雨畑の石

【本文】

卅九番

のきのつゆ玉屋の月のかけみれば  
みかゝすともことたりぬへし  
かきのからつきかけ見れば土左石の  
ほしのひかりはすくなかりけり  
軒の露玉やといひ、かきのから月影と

のきのつゆー〔類〕軒の露 かけー〔類〕影  
つきかけ見ればー〔類〕月かけみれば  
ひかりー〔類〕光  
月影ー〔類〕月かけ

いひ、ともに金玉をみかきいたり。よき持なるへし。

くりかへしくやしきものをかたおもひ

おもひのたまのかすかきりなく

あふ事はなをかたければ硯いし

こんかうしやうもかなはさりけり

左は、首尾やさしくよめり。右は、かたければ

こんかうしやうもかなはざるらむことほり

はよくきこえたれとも、第四の句、あまりに

こはくきこゆ。仍左勝へくや。



玉すり

これはちかころの

玉かな。火をも水

をもとりつへし。

念珠のつふに、

あたらしもの

哉。

硯きり

しやくわう寺は、



みかきいたり〔類〕みかき出たり

くりかへしくやしきものをかたおもひ〔類〕繰かへし悔しき物を片思

たま〔類〕玉 かす〔類〕数

あふ事〔類〕逢事 なを〔類〕猶

こんかうしやう〔類〕金剛しやう

かたければ〔類〕堅ければ

よくきこえ〔類〕能聞え

玉すり〔白〕〔類〕玉磨〔忠〕玉磨なますり

これは〔類〕是は

火をも水をもとりつへし〔白〕此珠にては火も水もとらるへきそ

〔忠〕此珠にては火も水もとらるへきそ火をも水をもとりつへし

つふに〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕〔類〕つふには

哉〔忠〕かな

硯きり〔白〕〔類〕硯土〔忠〕硯土すりきり

〔白〕かるめな石かな〔忠〕かためな石かな

しろみかかたくて、  
きりにくき。

しろみかかたくてー〔明〕〔白〕〔忠〕〔類〕しろみかたくて

【語注】

◎玉磨は、琥珀、瑪瑙、水晶などをすりみがいて、祭祀や装飾のための玉を作る職人。ただし、この三十九番では、玉磨の月の歌は『飛鳥井雅康 職人歌』の数珠屋の歌と同じであり、恋の歌も数珠のことを詠み、さらに、絵の中の言葉でも数珠のことに言及する。玉磨は念珠挽と実体はほとんど同じであったのであろうか。ただし、本職人歌合では、三十二番右に「念珠挽」があった。

硯切は、硯の原石を切つて硯を作る職人。白石本、類従本は「硯士」と表記するが、忠寄本は「硯士」と書いて「すりきり」と仮名を振る。

◎のきのつゆ……『飛鳥井雅康 職人歌』のすゝ屋の歌と同じ。

◎のきのつゆ 「軒の露」は、「ふるさと昔しのぶの軒の露袖にかけても香るたち花」（明日香井和歌集、上）のような例がないではないが、伝統的な歌に詠まれることは、まずない。荻原や軒端の露にそぼちつ八重立つ霧を分けぞ行くべき（源氏物語・夕霧）のような、「軒端の露」の例は若干あるが、これも一般的ではない。なぜ、あえてこういう表現を用いたのか、未考。近世の、サントリー美術館本『職人尽図屏風』、柳家本『職人尽図巻』などの数珠屋や、『人倫訓蒙図彙』の珠数師の絵では、軒先に数珠を吊るしているのが認められるが、あるいは、そのような数珠の玉を露に見立てたものか。または、御簾に垂らす飾り紐の端の玉を「露」というので、その「露」を意味したのものか。なお、「露」と「玉」とは縁語。

◎玉屋 『和漢通用集』に、「玉人 たまやうり 玉屋也」、『日葡辞書』に、「Tamaya. 宝石の加工をする宝石磨きの職人」などとあり、「玉磨」と同じで、より新しい言葉であろう。ここは、字数を合わせるために用いたに過ぎない。

◎月のかけ 露に宿った月影をいうか。未考。

◎みかゝすとでもことたりぬへし 月影があまりに美しいので、磨かなくても十分だ、というのである。結句は、「我がためは雪間の野辺に出でずとも垣根の若菜こと足りぬべし」(新撰六帖、一)のような例がないではないが、和歌としては異例の表現。

◎かきのからつきかけ見れば 「かきのから」は「牡蠣の殻」か。未考。『日本職人辞典』は、「硯師は、糸鋸で石材を切り、これに牡蠣殻や金剛砂などを振り掛け、石鑿で整形し磨き上げる」のだ、とする(「硯士」の項)。『中世職人語彙の研究』は、下の土左石が、牡蠣の殻に似た石だとする(「金剛砂」の項)。「かきのから」と「月影」との関係については、『新大系』は、「牡蠣の貝殻のような月影を見ると(月面には、かげがあり、しかも青白く澄んでいる)」と解し、『土佐国職人歌合』の硯師の歌、「室戸崎はれ渡る夜はかきの空月にむかしのしのぼるるかな」を引く。

◎土左石 「土左石」は、土佐国行当岬付近の海底から産する硯石の材。『毛吹草』四・名物・土佐の項に「西寺御崎硯石スクリイ 三月三日、塩干ニ海底ヨリ取也。時刻ニ西寺ノ僧、經ヲ説論スル也」とある。

◎ほしのひかりはすくなかりけり 上句「土左石の」から「星」と続く。「星」は、硯石に含まれる斑点。眼がん。『北窓瑣談』後編・四に、「唐土の硯石は、眼と云ふ事有りて、石に星の有るを珍重す。眼にも、死眼、活眼、涙眼などいふ事有りて、星に光沢有り、周圍きつぱりとしたるを宝とす。日本の硯石には、眼を珍重する事を聞かず。それ故、日本の石の硯に眼のあるを見たる事なし」とする。これによれば、日本では硯石の星は珍重されなかつたようである。土左石は星が少なく、上質とされたか。この点、未考。石の「星」を天体の「星」に言い掛けて、月が明るくて、星の光が目立たない、という。二十番左、鎧細工の月の歌、「このごろのならひなりけり町青星見えぬまで澄める月影」と同想(二十番語注「ほし見えぬまですめる月かけ」の項参照)。ただし、「光少なし」という表現は、「天の原道遠きかも月読の光少なし夜は更けにつつ」(綺語抄所引、万葉集七、雑歌)などの例がないではないが、一般的ではない。ここは、土左石の星との関係で、あえて、この表現を選んだのであろう。

◎金玉をみかきいたり 金や玉を磨き出したように優れている。「金玉」は、もとより、優れたものの譬えであるが、「別恋 浮かれ行く玉とだに見よ露はらふ身は白妙の袖の別れ路 身は白妙の袖の別れ路、めづらしく続き候ふや。

誠の金玉はこれに過ぐべからず(草根集一)のように、特に歌などについていうことがある。ただし、ここは冗談であらう。加えて、玉磨、硯切にかこつけて言う。

◎くりかへしくやしきものを 「繰り返しくやしき物は君にしもおもひよりけんしづのをだまき(源師光)」(千載集十三、恋歌三)を意識した表現か。ただし、ここは、「繰り返し」の「繰る」に、数珠を「繰る」意を掛ける。

◎かたおもひ 「片思ひ」の「片」に、「玉」の縁語「堅」を掛ける。

◎おもひのたまのかすかきりなく 上句の「片思ひ」から、「おもひ」を繰り返して、「念ひの珠」と続く。「念ひの珠」は、「念珠」の訓読から出た語。「人知れぬおもひのたまの緒たえなばなにして逢はぬ数を取らまし(伊勢大輔)」(新拾遺集、十二、恋歌二)などの例がないではないが、通常、和歌に用いる言葉ではない。数珠の珠が多くあるように、物思いの種が数限りなくある、というのである。

◎あふ事は…… 「逢ふことは……」という形式は、「我が恋は……」という形式同様、恋の歌の典型の一。「逢ふ事は雲るはるかに鳴る神の音に聞きつつ恋ひ渡るかな(貫之)」(古今集十一、恋歌一)、「逢ふことはかたのの里の笹の庵しのに露散る夜半の床かな(俊成)」(新古今集十二、恋歌二)などのように、普通、第二三句に、比喻するものを置き、第四五句で、そのもののように、(逢うことは)しかじかだ、と言う。本職人歌合でも、五番左、檜物師の恋の歌、「逢ふ事はそれぞとちめの桜榊かばかりとこそ思はざりしか」(この歌の場合は、第二三句と第四五句との繋がりは、「かば」という音のみであるが)が、同様のパターンであった。ここでは、「逢ふ事」を、第三句の「硯石」に譬える。

◎あふ事はなをかたければ硯いし 「かたければ」に、「難ければ」と「堅ければ」の意を掛ける。「なを」は、「逢ふ事」に関しては、今なおの意にも、よりいっそうの意にも取れるが、「硯石」に関しては、下句の「金剛砂」と較べてよりいっそう、の意と取るべきであらう。逢うことはなお難いので(よりいっそう堅いので)硯石のようだ、というのである。

◎こんかうしやうもかなはざりけり 「こんがうしやう」または「こんがうじやう」と読み、「こんがうしや(金剛砂)」

(運歩色葉) または「こんがうじや(金剛砂)」(前田本字類抄)の長音化したものであろう。後世のものであるが、『大和本草』に、「金剛沙 俗ニアヤマリテこんがうしやうト云フ」とあり、『和漢三才図会』六十一・雜石類も、「金剛石」を「こんがうしやう」と読む。なお、『毛吹草』四・名物は、「コンガウセン金剛砂」とする。金剛砂は、大和の金剛山から産する、石榴石の小結晶で、堅くて、玉や石を切ったり磨いたりするのに用いる。応永本『論語抄』学而に、「玉スリ石キリナドハ、先ノミニテ打ハリテ、後ニ金剛沙ニテ磨スル也」とある。「かなはざりけり」は、硯石に関しては、(硯石に) 對抗できない意。「逢ふ事」に関しては、願いが叶えられない意。

◎首尾やさしくよめり 「首尾」は、始めと終わり。また、始めから終わりまで。ここは、後者。歌について、しばしば用いる。「やさし」は、歌論用語で、女性的な優美、繊細な感情や情趣についていう(和歌大辞典「やさし」の項)。◎ことはりはよくきこえたれとも 理屈はよく通っているが。

◎第四の句、あまりにこはきこゆ 「こはし」は、歌論用語で、表現が粗野で優美さに欠けること。「金剛砂」という字音語を詠み込んだ点を難じるのであるが、同時に、金剛砂の「強し」(堅い)という性質に言い掛けて、戯れたのである。

◎これはちかころの玉かな 「近頃の」は、すばらしい。「玉」は、以下の言葉から、水晶玉であることが分かる。

◎火をも水をもとりつへし きつと、火をも水をも呼び寄せることだろう。白石本は「此珠にては火も水もとらるへきそ」、忠寄本は「此珠にては火も水もとらるへきそ」を見せ消ちにし、別に「火をも水をもとりつへし」とするが、いづれにしても、意味するところは大きな差がない。上質の水晶玉は、「火取る玉」、「水取る玉」と呼ばれて、火や水と呼ぶことができる。とされた。(火を取るの、レンズとしての機能による。)

◎念珠のつふに、あたらしもの哉 「つふに」は、尊経閣本、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は、すべて「つふには」。その方が通じやすい。「念珠の粒」は数珠の珠。「あたらしもの」は、惜しいことだ、の意の慣用語。

◎硯きり 白石本、類従本は「硯土」、忠寄本は「硯土」と書いて「すゝりきり」と仮名を振る。

◎しやくわう寺は、しろみかかたくて、きりにくき 白石本は、「この言葉の他に、「かるめな石かな」とある。ただし、



「る」は「た」とも読めなくはない。忠寄本は、「かためな石かな」を見せ消ちにする。「石王寺」は、丹波国（現京都府）石王寺山から取れる石材。硯の材として有名。黒色で白条や銀紋がある。『好古小録』雑考三十四に、本職人歌合を引き、「今（硯の）石材、所々ニ出テ乏シカラズ。就中、土佐、石王寺、雨端ノ類、上材也。……石王寺丹波、銀紋ウルミ易キハ、新坑ニシテ佳ナラズ」とする。「しろみかかたくて」は、白石本、忠寄本、明暦板本、類従本は、「しろみかかたくて」。「白身」は、白条や銀紋の部分を言うのである。『北窓瑣談』後編・四に、日本では一般に、硯石の眼（星）を珍重しないことを述べたの（「土左石」の項参照）に続けて、「但し、石王寺石など、黒き石に白き筋有りて、石王寺の妙とす。然れども、その白筋の所は、別段に堅くして、墨を磨るの妨げに成るなり。近來は、石王寺の石の白筋無きを、最も珍重する事になりたり」とある。

### 【絵】

玉磨は、剃髪し、僧衣風の衣を着、左手に持った原石を眺めているところ。前に、方形の箱。箱の中および外に、玉数個。剃髪し僧衣風の衣を着ているのは、寺院との関わり（数珠を作ること）によるのであろう。

硯切は、剃髪し、直垂、袴姿で、台の上に載せた硯を鑿で彫っているところ。前に、盥と鑿二本。大小の削り滓のような物が散乱。尊経閣本、白石本、明暦板本、類従本は、削り滓のような物の小さい方は描かない。剃髪しているのは、寺院との関わりによるのであろう。

### 【参考】

○われらのインク壺は角で作られ、円形である。彼らのは細長い石で作られている。

（日本覚書、十）

○われらのインク壺には、蓋とペン拭きがついている。日本には、それがない。

（同）

○文字にかならず伴う物は、主として紙、墨壺（硯）、墨、毛筆、それに印すなわち彼らの用いる印章である。……墨をすったり、字を書くために筆をひたしたりする墨壺（硯）は、それに適した滑らかな各種の大理石からできて

いて、いろいろな形をしている。あるものは丸く、またあるものは比率からいうと横よりも縦の方が長い長方形である。周辺には高くなつた縁がついていて、中央には一つの箱アキタがあり、そのなかで墨がすられ、その端にはきれいに彫られた一つの水溜ボツがあつて、そこに墨をするために水が注がれる。墨がすられて十分に濃くなると、そこへ返し集めて、その水溜のなかで、筆の先を墨にひたし、例の箱のところ、筆先をとがらせる。その箱は画家が絵具で絵を描く時、そこで絵具を調合し混ぜる石または板（パレット）のようなものである。これらの硯のあるものは、高価なもので彼らの間で珍重されている。その使用も王国全土にはなほ普及しているので、それによつて生活しているこの技術の職人（硯師）がいる。

（日本教会史、二巻、六章）

#### 四十番 一文字売 燈心売

#### 【職人尽】

〔俳諧職人尽〕 一もじ売 一文字や一字の題の忘れ草ハ百花ハ 葱白く洗ひ立てたる寒さ哉ハ翁ハ 下男水仙かりつ夜の河豚ハ一品ハ 葱売の籠軽さうな歌袋ハ祇章ハ 一文字はしらねや鰻の隠し妻ハ寥和ハ 燈心売 子祭や梅待つ宿の赤豆飯ハ山店ハ 子祭に目貫掘り出す自慢哉ハ史邦ハ 夕立や燈心売の荷も重しハ英露ハ 吹けば飛ぶ燈心売の涼みかなハ志諷ハ 身のためにちと売り残せ子燈心ハ万旭ハ 書き初めの下絵して見ん子燈心ハ寥和ハ

#### 【本文】

#### 四十番

紅葉せて秋もゝえきのうつほ草

ゝえきー〔明〕もえき〔類〕萌黄 うつほ草ー〔類〕うつほ艸

つゆなき玉と見ゆる月かな

月に寝ぬとうしみうりの身のわさを

たれきゝしらぬいひきとかいふ

右歌、心詞よくとのほりて、殊に、源氏

物語權の巻にや、程もなくいひきとか聞

しらぬをとすれば、といへること葉も、この

燈心によくひき出られて、艶にきこえ侍。

左哥、露なき玉と侍る、疑なきにあらされ

とも、水晶の葱なとも申侍れば、難ある

へからさる歟。なすらへて持と申へくや。

こひといふひともしゆへにいかにして

かきやるふみのかすつくすらむ

とうしみのちきりやすきをためしにて

いさゝは人をまつひきてみん

左、一文字ゆへにはかりいひて、此題にかな

ふへしとは心え侍らす。右、尤たくみに

して、凡骨さらに及かたし。左をかへり

みるにをよはず。右にかたぬき侍るへし。

◇

とうしみうり

◇

つゆー〔類〕露 見ゆる月かなー〔類〕みゆる月哉  
とうしみうりー〔類〕とうしみ売 わさー〔類〕業  
たれきゝしらぬー〔類〕誰聞しらぬ  
よくとゝのほりてー〔類〕能調ふりて

をとー〔類〕音 こと葉ー〔明〕ことは〔類〕詞 このー〔類〕此

ひき出られてー〔類〕引出られて きこえー〔類〕聞え

侍るー〔類〕侍 疑なきにあらされともー〔類〕疑無にあらされ共

難あるへからさる歟ー〔類〕不可有難歟

なすらへてー〔類〕准て 申へくやー〔類〕可申や

こひー〔類〕恋 ひとつもしー〔類〕一もし

ふみー〔類〕文 つくすらむー〔類〕尽すらん

ちきりやすきー〔類〕契やすき

いさゝはー〔類〕いざゝば まつー〔明〕類先 ひきてみんー〔類〕引てみむ

左ー〔明〕右 ゆへー〔類〕故 いひてー〔類〕云て かなふへしー〔類〕叶へし

心え侍らすー〔類〕心得侍らす 右ー〔明〕左 たくみー〔類〕巧

さらにー〔類〕更に 左ー〔明〕右 かへりみるにをよはずー〔類〕顧に不及

右ー〔明〕左 かたぬき侍るへしー〔類〕肩ぬき侍へし

〔明〕「一もじうり」「とうしんうり」ノ順

とうしみうりー〔白〕〔類〕燈心うり〔忠〕四十番燈心うり〔明〕とうしんうり



一文字うり

一文字うりー〔白〕葱<sup>ヒトモシ</sup>壳〔忠〕葱<sup>ヒトモシ</sup>壳〔明〕一もじうり〔類〕葱うり

【語注】

◎「燈心」は、「とうしみ」、「とうじみ」または「とうしん」などと読む。燈油にひたして火を点ずるための細長い芯。蘭草の一種燈心草の茎の髓を引き抜いて作る。燈心壳は燈心を売る者の謂であるが、月・恋の両歌にも見るように、燈心を作る作業も兼ねていたのであろう。

「一文字」は、女房言葉で、葱のことを「き」と一文字で言ったことから言うという。頼原本『誹諧連歌抄』夏部に、「唐までとづく手こそありけれ／我が背戸の一もじ畠瓜植ゑて」の付合があり、饅頭屋本『節用集』に、「葱<sup>ヒトモシ</sup>」とある。ただし、「一文字壳」という言葉は管見に入らない。一文字壳が独立した職業として成り立っていたわけではないであらう。

◎紅葉せて秋もゝえきの 紅葉することなく、秋も萌黄色の。

◎うつほ草 『海人藻介』に、「内裏、仙洞ニハ、一切ノ食物ニ異名ヲ付テ被レ召事也。……葱ハウツホ。如レ此異名ヲ

被<sub>レ</sub>付、『日葡辞書』(補遺)に、「Vicuno. 例、Vicunona. 内部がうつろで中空な(もの)。』また、葱。これは婦人語である」とあり、葱のことを女房詞で「うつほ」とも言ったことが分かる。「うつほ草」も、この「うつほ」と同じ意味であろう。後世の例であるが、『物類称呼』三・生植に、「ひともしを詠ぜし歌」として、「引き見れば根は白糸のうつほ草ひともしなれど数の多きよ」を挙げる(「冬葱」の項)。近代では、岐阜県の一部に「うつほぐさ」、高知県長岡郡国府に「うつろぐさ」の方言がある(『日本国語大辞典』「藪草」の項)。ただし、下句および判詞からすれば、こは辣韭のことか。この点、未考。

◎つゆなき玉 「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉を千々に染むらむ<sub>レ</sub>敏行<sub>レ</sub>」(古今集五、秋歌下)、「白露も時雨もいたくもる山は下葉残らず色づきにけり<sub>レ</sub>入貫之<sub>レ</sub>」(古今集五、秋歌下)などのように、露や時雨は、草木を紅葉させる原因と考えられていた。そこで、上句の「紅葉せで秋も萌黄」を受けて、「露なき」と言う。「玉」は、未考。判詞からすれば、辣韭の鱗莖か。『中世職人語彙の研究』は、「歌の詠者は、玉からは『火をも水をもとりつべし』(三十九番左にもみえる)を前提にして、月は玉のようだが露のない玉だといおうとする」とする。「草」、「露」、「玉」は縁語。

◎月に寝ぬ 「月に寝ず」は、「行く秋も今やなかばに過ぎぬらむ月に寝ぬ夜の鐘の一声」(秋篠月清集、上、秋部)、「秋も経ぬ月に寝ぬ夜のさびしさを思ひあかしの波風の音<sub>レ</sub>兵衛内侍<sub>レ</sub>」(建保名所百首)などのごとく、月を眺め明かして寝ない、の意味と取るのが普通であるが、こは、そう思わせておいて、実は、月明かりの下で夜業をしているにすぎないのだ、と逆転する。十二番本『東北院職人歌合』三番左、鍛冶の月の歌、「月に寝ぬ宿とや人の思ふらんいつもたえせぬ相槌の音」(五番本、二番左)と同想。

◎たれき<sub>レ</sub>しらぬいひき 誰も聞いたことのないいびき。「いびき」に、「鼾」と「藺引き」とを掛ける。「藺引き」は、藺を引き抜いて燈心を作ることに違いないが、そのような名詞は管見に入らない。「鼾」と掛けるために、強引に造語したものであろう。「聞き知らぬいびき」は、判詞も指摘するとおり、『源氏物語』朝顔巻、源氏が女五宮を訪れた場面、「……との給ふ程もなく、鼾とか、聞き知らぬ音すれば、喜びながら立ち出で給はんとするに」の引用。ただし、

『源氏物語』では、女五宮の無神経な躰を、源氏の立場から「聞き知らぬ音」と表現したのであるが、ここでは、文字通りの意味で、これこそ本当に誰も聞いたことのない「躰」（実は「蘭引き」）だ、と戯れたのである。なお、「燈心売」―「蘭引き」―「躰」の連想については、『竹馬狂吟集』十、雑部に、「いびきの音ぞながく聞ゆる／となりにとはうじみ売りや泊るらん」（『犬筑波集』には、「いびきの音ぞたかくきこゆる／となりにとは燈心売の宿かりて」と、このこと同発想の付合がある。『竹馬狂吟集』は明応八年の序を持ち、一方、本職人歌合は明応九年ころの成立と考えられており（岩崎佳枝『七十一番職人歌合』成立年時考）、「文学・語学」九六号、昭和五十八年一月）、両者の前後関係が注目される。なお、「躰」とは関係ないが、天理本狂言「伊文字」には、「是は、伊を引いてつまるほどに、燈心引の娘であらう」、同「いろは」に、「へ……さらば一字づつ言わうト云テいへ燈心へ是はなにと云事ぞへいを引けば燈心があるほどに申ト云」という台詞があり、「蘭を引く」とことと「燈心」との関わりが好んで話題にされたことを窺わせる。

◎殊に、源氏物語権の巻にや、程もなくいひきとか聞しらぬをとすれば、といへること葉 前項参照。

◎この燈心によくひき出られて 「引き出づ」は、引用すること。似た表現に、「言ひ出づ」、「思ひ寄す」などがあるが、ここは、燈心の縁で「引き出づ」と言う。なお、「られ」は、受身の意味に取るべきであろう。（本職人歌合の判詞では、歌の作者に対する尊敬語は、ほとんど用いられていない。）この燈心にぴったり合うように引き出されていて。

◎艶にきこえ侍 「艶」は歌論用語で、表現から感じられる感覺的・気分的情調美。俊成は、余情美の一要素としてとりあげ、臙化・遮断された美的対象への憧憬、あるいは、それを繊細・微妙に感ずる心が、余情として感じとられる情調構成の歌を「艶」と評価した。具体的な歌合判詞では、古歌を用いて内容深化をはかる本歌取りの歌や、物語の世界を借りて重層化する本説の歌など、複雑な情調構成がなされている場合に用いられることも多い（有吉 保『和歌文学辞典』「艶」の項）。ここも、源氏物語を本説とした歌で、その限りにおいて、「艶」と評されるにふさわしいが、それは、勿論、冗談である。

◎露なき玉と侍る、疑なきにあらされとも 一文字売の歌に「玉」が出てくる理由が、判者にも十分納得出来なかつ

たのであろう。

◎水晶の葱なども申侍れば、難あるへからざる歟 明曆板本は、「水晶の葱」と仮名を振る。『本草綱目』胡葱に、「水晶葱者、葱葉蒜根、与薤相似、不臭亦其類也」とあり、『和漢三才図会』九十九に、「水晶葱」を「らつきよ」と読む。「水晶の葱」という言葉があるのだから、「玉」という言葉も、全く理解できないわけではない、というのであろう。

◎なすらへて持と申へくや 歌合判詞の常套句。左右の歌の優劣のないことをいう（十九番語注「なすらへて為持」の項参照）。

◎こひといふひともしゆへに 「恋」というたった一文字のために。「一文字」に、葱の意の「一文字」を掛ける。

◎いかにしてかきやるふみのかすつくすらむ どうして、書き送る文の数を尽くすのであろう。

◎とうしみのちきりやすきをためしにて 「千切り」に「契り」を掛ける。燈心の千切り＝契りやすいことを手本として。

◎いざゝは 感動詞「いざ」と接続助詞「さは」（「さば」と読むべきだとする説もある。ちなみに、この箇所は、明曆板本は「いざゝば」、類従本も「いざゝば」と例外的に濁点を振る。）の熟した語。さあ、それでは、「忘るるかいざさは我も忘れなん人に従ふ心とならば八読人不知」（拾遺集十五、恋五）など、歌にまま用いられる。

◎人をまつひきてみん 燈心を引くように、人の心を先ず引いてみよう、というのであるが、「人を引く」という表現は、和歌では異例。「引く引く引くとて鳴子は引かで、あの人の殿引く」（閑吟集）などの、歌謡の世界に近い表現か。

◎左、一文字ゆへにはかりいひて…… 以下の判詞は、明曆板本は、「左」と「右」とがすべて逆になっている。（明曆板本の板木をほぼそのまま用いたと思われる延享板本では、最初の「右、一文字ゆへにはかりいひて」の「右」のみ、「左」と訂正している。）そもそも、判詞を右歌の評から始めるのはやや異例で（四十六番恋、六十六番月の判詞のような例がないではない）、そのことによる混乱か。また、後述の、明曆板本を除いて絵の順序が逆になっていることも、これらのことと関わるか。

◎一文字ゆへにはかりいひて、此題にかなふへしとは心え侍らす 一文字売の歌は、葱の意の「一文字」を、たつ

た一文字の意で用いたのであるが、その「一文字」自体は、題の「恋」とは直接関係のない言葉である。その点を難じたのであろう。具体的には、職能に関わる言葉で、しかも恋に寄せある言葉を、もつと他に用いるべきだ、というのであろう。なお、『新大系』は、「題」を、一文字売という詠題と解するが、いかがか。

◎凡骨さらに及かたし 並の器量の者では、とうてい及びがたい歌だ、というのであるが、これも冗談である。

◎左をかへりみるにをよはず 左歌は問題にならない、の意であるが、「左をかへりみる」は、漢語の「左顧」（目上の者が目下の者に目をかけること）を意識した言葉であらう。

◎右にかたぬき侍るへし 「右にかたぬぐ」は、漢語「左袒」の訓読、「左に袒ぐ」（たとえば『錦繡段抄』に、「軍中皆左袒ヌヒタゾ」とある）をもじった言葉。「左袒」は、漢の高祖の死後、呂氏の専横に対して、忠臣周勃が軍を集めて、「呂氏ノ為ニスルモノハ右袒セヨ。劉氏ノ為ニスルモノハ左袒セヨ」と言ったところ、軍中皆、左の肩を脱いだという、『史記』呂后本紀に見える故事から出た言葉で、特定の人物やものごとを支持すること。なお、「かたぬぐ」だけでも、「左袒」の意味で用いられるが、ここは、「左」でなく、あえて「右」にかたぬぐのだ、と戯れたと見るべきであらう。

◎とうしみうり 一文字うり 底本を始め、尊経閣本、白石本、忠寄本、類従本、いずれも、絵の順序を誤っている。前述の、判詞が右歌の評から始まっていることと関係あるか。明暦板本は、「一文字売」、「燈心売」の順に正している。なお、同様の錯誤が、二十九番、杵造・鞠括にも見られる。

◎とうしみうり 白石本、類従本は「燈心うり」、明暦板本は「とうしんうり」。

### 【絵】

語注で述べたとおり、明暦板本を除き、絵の順序を誤っている。

燈心売は、手拭を被り、小袖の上に打掛を羽織り、草鞋を履く。左手に束ねた燈心を持つ。横に、藺草と笠。明暦板本は、他の諸本と較べて、左右が逆転した絵。これは、絵が一文字売、燈心売の順序になっていることによる。白



石本、忠寄本、明曆板本、類従本は蘭草を描かない。

一文字売は白い笠を被り、小袖を着、脚絆、草鞋を履く。前に、葱の入った畚を両端に付けた枴。明曆板本は、他の諸本と較べて、左右が逆転した絵。

【参考】

○ いびきの音ぞながく聞ゆる

となりにはとうじみ売りや泊るらん

(竹馬狂吟集)

○ へあふ尤じや。さらば一字づゝ言わうト云テーい子へ燈心へ是はなにと云事ぞ子へいを引けば燈心があるほどに申ト云

(天理本狂言「いろは」)

○ へ恋しくはとうてもきたれ伊ト云テ、つまつたト云。是は、伊を引いてつまるほどに、燈心引の娘であらうト云

(同「伊文字」)